



TITLE:

# 「頭がない私」における独我論と Wittgensteinの独我論

AUTHOR(S):

坂井, 賢太郎

---

CITATION:

坂井, 賢太郎. 「頭がない私」における独我論とWittgensteinの独我論.  
京都大学文学部哲学研究室紀要 2010, 13: 29-39

ISSUE DATE:

2010-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137552>

RIGHT:

# 「頭がない私」における独我論と Wittgenstein の独我論

坂井賢太郎

## 0. はじめに

本稿では、Donald E. Harding の短編小説 ‘On Having No Head’（「頭がない私」永井均訳）の記述を手引きとして、「私とは何か」という問題を考える。しかし、本稿の目的はその問題に解答を与えることではなく、それを考えていくモデルを検討することである。そのために「私とは何か」という問題に解答を与える一つの方法として独我論を取り上げる。「頭がない私」ではある種の独我論が展開される。しかし、これは私が見る限りではうまくいかない。他方で Ludwig Wittgenstein の『論理哲学論考』（以下『論考』とする）において展開される独我論は非常に特異な仕方ではあるがうまくいっていると私には思われる。なぜ、「頭がない私」の独我論はうまくいかず、『論考』の独我論はうまくいくのか。この二つの独我論を比較することでその理由を見定め、「私とは何か」という問題を考えていくための一つのモデルを提案したい。本稿の構成は 1. において「頭がない私」の独我論の特徴をまとめ、2. において『論考』の独我論の特徴をまとめる。そして、3. においてこの二つの独我論を比較し、「頭がない私」の独我論がうまくいかない理由を見定め、4. においてそこから示唆される「私とは何か」という問題を考えていくのによりよいモデルを提案する。

## 1. 「頭がない私」の独我論

「頭がない私」を概説するとこうなる。冒頭で次のように語られる。

私には頭がないとわかった日こそ、私の生涯で最良の日、いわば私の生れ変わった日であった。こう言ったからといって、是が非でも興味をひこうとして冒頭に置かれる気のきいた切り出し文句の類だと思わないでいただきたい。私はまったく本気でこう言いたいのだ。——私には頭がない。（「頭がない私」 32 頁）

この小説の主人公（以降「彼」と呼ぼう）は比喩や言い回しとしてではなく、「頭」という私たち人間全てが持っているものを事実、持っていないと主張する。「彼」がそれに気づいたのは、「私とは何か」という問題に夢中になっていた時期である。それは「彼」がたまたまヒマラヤ山中を歩いていたときに起こった。

実際に起こったことはばかばかしいほどに単純で、劇的なところはなかった。私は考えることをやめたのである。独特の静寂、特異な種類の気のゆるみと無感覚が私を襲った。理性と想像力と心の中のあらゆるおしゃべりが鎮まっていた。一時、私は完全に言葉を失った。未来と過去は消え去った。私は、私が誰であり何であるのかを、私の名を、人間であることを、動物であることを、私のものと言えるすべてのことを忘れた。それは、あたかも私が、その瞬間、記憶というものを一切もたぬ、心のない新種として生れたかのようであった。今だけ、つまり現在の瞬間と、その瞬間においてありありと与えられたものだけが存在していた。（「頭がない私」 32-33 頁）

脚は靴で終わっている、腕は手で終わっている。しかし、肩の上は何ものでも終わっていない。頭で終わっていないことは確かである。「彼」は頭が存在すべきその場所に、通常の空間ではない、「広大に満たされた広大な空」を見出す。その空は「彼」が見ているものすべてが入り込める広大な空なのだ。そして、「彼」はこの発見以降次のように考えるようになる。

したがって、二種類の——まったく異なった二つの人種の——人間が存在することになる。一方は明らかに肩の上に頭（私が「頭」というのは種々の穴のある、毛の生えた八インチ球のことだが）を載せている人種で、その実例は無数にある。それに対して他方は、明らかに肩の上にそんなものを載せてはいない人種で、その実例はたった一つである。（「頭がない私」 34-35 頁）

ここが、「彼」の独我論の第一の特徴である。「彼」は他者の存在を否定せず、観念論的に自己の身体の実在も否定しない。「彼」が否定するのは、眺めとは区別されるような眺める者が住みつくような場所としての自己の頭の実在なのである。「彼」はこの自身の直観を擁護し、常識の立場からの反論に答え、自分の洞察を自分自身に対して「正当化する」ために次のような議論を展開する。

「彼」は自分が言うこと反論しようとする者（「彼」はこれを「懷疑主義者」と呼ぶ）が、「彼」は頭を欠いているかもしれないが鼻はあるのではないか、と言うことを考える。そして、その鼻と呼ばれるものに対して「懷疑主義者」がストレート・パンチをあげせもしようものなら、あたかも「彼」が鼻というきわめて堅固で殴られるに耐えうるものを持っているかのような不愉快な結果になるのは目に見えていると語る。その感覚は、そして

この中心部から完全に消え去らない微妙な緊張や動きなどの複合体、とりわけ「彼」が手で頭があるべき場所を探る時に起こる触感は頭が存在を示す証拠となりうるのではないか。

「彼」はそんなことになりはしないと考える。そのような感覚が寄せ集まっても、「色のついた三次元のあらゆる諸形態」というものを「彼」において示すことはない。従って、やはり自分は頭をもたないのだと彼は考える。また、鏡を見るということも「彼」に頭があることを示しはしない。鏡に映る像が「彼」の像であると考えた根拠はどこにもない。

私はかつて、年をとらず、堅固で限界のない、明晰で一点の汚れもないこの空間以外の何かであったことは一度もない。私が、向こう側にいるあの凝視している生霊と、今ここにそして永遠に明々白々な姿で認知できる私自身とを混同するなどとは、思いもよらないことである。（「頭がない私」 41 頁）

「彼」は現在の経験というものが、それがどんな意味で言われようとも空っぽで何も無い頭においてしか生起しないと考える。ここから、「彼」の世界と「彼」の頭は両立不可能となり、「彼」が現在の経験を持っている以上、排除されるのは生物的組織をもった「彼」の頭なのだ。

なおも「彼」が頭をもつとする「懐疑主義者」を改心させるただ一つの方法として、その「懐疑主義者」を連れてきて、自分で観察させればよいと「彼」は考える。

すなわち、「懐疑主義者」は部屋の向こう側から観察を始める。このとき「彼」は頭がある完全な人間に見える。そして徐々に近づいていく。「懐疑主義者」は「彼」の身体の後半しか見えなくなり、ぼやけた頬や眼や鼻だけとなり、接触点においては何も見えなくなる。ここで「懐疑主義者」が必要な科学的道具を持っている場合には、組織、細胞、分子とさらに近づいていける。最後に「懐疑主義者」が見出すのは、結局何も見えない場所、すなわち「彼」の頭があるべき場所に見出す空である。このとき、「懐疑主義者」がうしろを振り返ったとき、「彼」と同じものを見出す。すなわち、

彼もまた、この中心点が無限の大きさへ、この無がすべてへ、このここがあらゆるところへと拡大するのを見出すであろう。（「頭がない私」 39 頁）

ここに、「彼」の懐疑論の第二の特徴がある。「彼」は観察者においては、「彼」が頭を持つとすることを認める。しかし、これは「彼」において、「彼」が頭を持つことを含意しない。

以上より、「彼」の独我論は次の二つの特徴を持っていると言える。

- i) 他者の存在、物理的世界、自己が（頭以外の）身体を持つことを許容すること。
- ii) 第三人称的視点においては頭がある。しかし、明らかに第一人称的視点では私に頭はない。従って、私の頭に関して第三人称的な視点は間違っているとする。

「彼」の独我論は自己と自己へのあらわれしか存在しないといういわゆる独我論とは異なる、非常に小さな独我論である。しかし、この独我論すらうまくいかない。それは、「彼」とそれ以外の間の、すなわち、頭がある人間と頭がない「彼」との重要な意味での差異がうまく言えないからである。実際、「彼」がこれに苦しんでいると思われる描写が存在する。ここでいう重要な意味での差異とは何か、そしてその差異が言えないとどのような意味で苦しまなければならないか。詳しくは最後で述べることにして、「うまくいく」独我論として Wittgenstein の独我論を見てみよう。

## 2. Wittgenstein の独我論

『論考』における Wittgenstein の独我論は次のように導出される。なおこの解釈は野矢(2002)に従ったものである。

『論考』は彼が序において語っているように、思考の限界を言語において引き、それを超える哲学的諸問題、すなわち「語りえざるもの」に対して沈黙すべきであるということを示した書である。彼は『論考』において

私の言語の限界が私の世界の限界を意味する。(『論理哲学論考』 第 5.6 節)

すなわち、独我論の言わんとするところはまったく正しい。ただ、それは語られえず、示されているのである。(『論理哲学論考』 第 5.62 節)

と語っている。この部分がいかなる意味を持つか、そして、いわゆる独我論と Wittgenstein の独我論はいかなる点で違うか。それを考えるために私たちはまず「論考」というプログラム全体がいかなるものであるのかを確認しておかねばならない。

野矢は野矢(2002, 210-211 頁)において先の第 5.6 節にいたるまでの『論考』を次のように整理している。少し長いが簡潔にまとめられていると私は思うので引用すると、

まず一番台で出発点となる現実世界について確認する。世界は事実から成り立つ。

二・〇番台で世界の可能性へと目が向けられ、それに伴って二・一番台で像に関して一般的に論じられる。

三・〇番台で像としての思考について軽く触れたあと、三・一番台から像ということで中心的に考えられている命題についての検討に入る。以下三番台は主として命題の名への分析について論じられ、続く四・〇番台で主として命題の意味について論じられる。この三・一から四・〇番台までが、『論考』の理論的中心の前半を成す。名前をつけられるならば、「要素命題論」と呼べる部分である。

ここで少しインターバルが入り、哲学についてのコメントが挿入されている。そして、そのあと残りの四番台では要素命題と複合命題について論じられる。ここからが『論考』の理論的中心の後半になる。名前をつけるならば「真理操作論」と呼べる部分である。そして五番台は、真理操作という観点から論理について論じられる。それが五・五番台まで続く・・・(『「論理哲学論考」を読む』 210-211 頁)

そして、ここから Wittgenstein の独我論が論じられる。まず、私たちが確認しておかねばならないのは、野矢によると Wittgenstein の独我論は「現象主義的独我論」(すなわち、いわゆる独我論)ではないということである。現象主義とは、すべてを私の意識への現れとして捉えようとする考え方であり、それを徹底していくと私においてあらわれえない、例えば「他人の意識」や「他の意識主体」は意味を失う。他我は消え去り、自我のみが存在する。すなわち、独我論の世界となる。

しかし、Wittgenstein の独我論はこのタイプの独我論ではないと野矢は論じる。その根拠として野矢は、先のまとめにおいて第5.6節までに現象主義をにおわせる部分がないこと、そして第5.6節の三つ前の第5.563節で

われわれの日常言語のすべての命題は、実際、そのあるがままで、論理的に完全に秩序づけられている。(『論理哲学論考』第5.563節)

と述べられていることから、「私の言語」は現象主義が採用するような特殊な言語(現象言語)ではないと考えられることの二点を挙げている。Wittgenstein の独我論が現象主義的独我論でないとするれば、それはどのような独我論か。

Wittgenstein は第5.6節の少し前において、

経験的実在は対象の総体によって限界づけられる。限界は再び要素命題の総体において示されている。(『論理哲学論考』第 5.5561 節)

と語る。これを野矢は次のように解釈する。『論考』は事実から対象を切り出し、論理空間を張る。このとき、もととなる事実は私が存在論的に経験した事実である。これが論理空間と言語を規定する。従って言語は「私の言語」であるしかない。そして、論理空間は現実世界を含むような可能な状況の総体であるゆえ、論理空間の限界、すなわち私の言語の限界が世界の限界なのである。野矢の指摘に従えば、ここで世界の意味は第 1 節で規定された「事実の総体」から「対象の総体」に変容している。

そして野矢は次のように Wittgenstein の独我論が導かれると主張する。

私は、私が出会ってきた対象の総体に基づいて思考可能性を開くしかない。そして、世界もまた、私の思考可能性の内におさまる。それゆえ、いかなる世界であれ、それは私が出会ってきた対象の総体ときっかり同じだけの対象の総体を含んでいなければならない。(『論理哲学論考』を読む』 224 頁)

ここで持ち上がる疑問は、では未知の対象は「世界」に含まれないのかということである。野矢は Wittgenstein が次のように答えるだろうと考える。その未知の対象というようなものは存在しているかもしれないが存在しているという根拠はない。すなわち、まともな思考ではありえない。それゆえ、現実世界が私の思考可能性の一部であるならば、世界に存在する対象はすべて私がすでに出会っているものでしかありえない。すなわち、「世界が私の理解可能なもの、語りうるものであるならば、世界の存在論は私の存在論と一致していなければならない」という強い要請のために『論考』は独我論となる。野矢はこの Wittgenstein の独我論を現象主義的独我論と対比して「存在論的独我論」と呼ぶ。

### 3. 二つの独我論の比較

2. のような解釈を取るとすると一見、「頭がない私」の主人公(すなわち「彼」)の独我論との親近性を示すように思われる次の節は、実は全く違う独我論のもとで言われたことだとわかる。

思考し表象する主体は存在しない。(『論理哲学論考』 第 5.631 節)

世界の中のどこに形而上学的な主体が認められうるのか。君は、これは眼と視野の関係と同じ事情だと言う。だが、君は現実に見ることはない。そして、視野におけるいかなるものからも、それが眼によって見られていることは推測されない。(『論理哲学論考』 第 5.633 節)

「彼」の独我論はこの「思考し表象する主体」の第三人称的な世界での位置づけとしての頭の存在を否定したと私は考える。しかし、このために「彼」は「常識的な」主張を「懐疑主義」とみなさざるを得ないような苦境に立たされることになる。Wittgenstein の独我論はもっと徹底している。

上記二つの間にある節で Wittgenstein は次のように語る。

主体は世界に属さない。それは世界の限界である。(『論理哲学論考』 第 5.632 節)

これがどのような意味を持つか、それは次の節で明かされる。

ここにおいて、独我論を徹底すると純粋な实在論と一致することが見てとれる。独我論の自我は広がりやを欠いた点にまで縮退し、自我に対応する实在が残される。(『論理哲学論考』 第 5.64 節)

すなわち、これ野矢に従うと次のように解釈できる。この私であり、主体であるような身体を持った者が世界の中に存在する。それは世界の事実を表象しているように見える。しかし、実際はそうではない。その身体は対象の一つにすぎない。世界は事実の総体であり、とりわけ、「私の事実」、の総体であり、そこから対象によって規定される世界こそが「私の世界」である。逆にこの世界は「私の」世界であることによって規定される。それゆえ、「私」は世界を規定する限界であり、その限界としてのみ存在する。世界の事実を表象しているように見える世界内存在者であるような独我論の自我は縮退し、ついには対象としての私の身体が残る。ここで徹底した独我論と純粋な实在論は一致する。

ここで、「彼」の独我論との比較において Wittgenstein の独我論を考えると、

i') 他者の存在、物理的世界、自己が身体を持つことを許容する。

ただし、すべて私の事実のなかの対象としてのみである。



ii') 「世界」は「私の世界」であるゆえ、第一人称と第三人称の非対称性は存在しない。

このように、Wittgenstein の独我論は「私」の特異性を主張するのではなく、「世界」の方を変えてしまうことによって独我論となる。これは、私にはうまくいっているように思われる。少なくとも彼の強い要請「世界が私の理解可能なもの、語りうるものであるならば、世界の存在論は私の存在論と一致していなければならない」を受け入れる限りでは、簡単に反論できるものではない。これがうまくいっているように思われるのはなぜか。それは野矢が指摘しているように Wittgenstein の独我論が「存在論的独我論」であるからである。

ここで、「彼」の独我論を検討してみよう。「彼」の独我論は他者の存在を認めている限りで現象主義的独我論ではなく、まして存在論的独我論でもない。それは、「世界内-認識論的独我論」とでもいうべきであるような、不徹底な独我論なのである。不徹底であるゆえに「彼」は他者との差異化ができないことに苦しむ。それは次の点にあらわれていると私は思う。「彼」は「頭がない私」の最後でこう述べている。

本当は、見るという動詞には二つのまったく違った意味があるのだ。一組のカップルが向かいあって対話している時、彼らの顔が数十センチ離れてちゃんと存在していても、われわれは二人は互いに見ていると言う。(中略) 第三人称の二人のあいだに実際に起こっているのは、視覚的情報伝達、すなわち連続した自己充足的な物理的過程(光波、水晶体、網膜、大脳皮質の視覚野など)である。そこに科学者は、「心」や「見ること」が介在し(そのことによって)何か違いを生ずるようないかなる裂け目も見出しはしない。これと対照的に、真に見るということは第一人称的であって、眼を使うことはない。賢者の言葉遣いにおいては、およそ何かを見たり聞いたり経験したりするのは、仏陀、あるいは婆羅門、あるいはアラー、あるいは神だけなのである。  
(「頭がない私」 43 頁)

「彼」は真に見ることができるものの中に自分を含めていない。これは、なぜか。それは、「彼」が眼を使わないにしても、真に見ることができるすると、「彼」と他者の対称性より他の「頭がある」人間も真に見ることができるようになってしまうと「彼」が考えているからではないだろうか。

「彼」が「頭がない」とするすべての証拠は、ことごとく主観的なものである。そしてこの証拠は、頭がある他の人間も可能なものである。「彼」の自分には頭がないという実感

を示すためには、どこかで頭がある人間との差異を示さなければならない。そこで、彼は第一人称的な視点と第三人称的な視点の非対称性を持ち出すが、それとて頭がある人間も共有する認識である。そこで「真に見ること」と「見ること」を区別することによって差異化を図るが、それでも決定的な差異を示すことはできない。それゆえ、存在論的に異なるものとして仏陀や神が「真に見ること」ができるとすることはできるが、その中に自己を含めることはできないのである。

このディレンマは「彼」が「頭がない」ということ以外は他の頭がある人間たちと同じ人間にとどまろうとしていることから生じるのではないかと私は考える。そのため、「彼」は自己とそれ以外の人間の存在論的な差異化ができない。そこで「彼」が苦しむのが同著の編者短評で D.R. Hofstadter が示唆しているように、「彼」の第一人称的視点の第三人称的視点への回収である。回収されることは彼の「人生最良の日」を感じさせた強烈な直観からの帰結の放棄を求める。

#### 4. 「私とは何か」という問いと二つの独我論が示唆すること

「彼」が「頭がない」と感じるに至る直前まで考えていた「私とは何か」という問いは、実はまだ全然解決していないのではないだろうか。それは、私は他者と同じ人間であるのに、特別な「私」であるのは何故か、すなわち他者と私が同じであるのに違うのはなぜかという問いであったのかもしれない。

この問いは多かれ少なかれ誰もが持つ疑問であり、自分の心は自分にしかわからないというきわめて日常的な事実から生じる問いである。しかし、「私とは何か」と言葉で問う、またはこの世界の中での存在として考えることによって奇妙に変容してしまう問いでもある。この問いの処理の仕方としては、この私は類としては他者と同じであるが、個物としては同じではないと考えるという方法がある。では、その類の中でこれが、他の誰でもないこの私であるとするメルクマールは何か。

「彼」はそのメルクマールとして、強烈な直観から得た「頭がない」ということを使おうとしたのではないだろうか。しかし、頭はある。これは他者のみならず「彼」の内なる懷疑主義者が絶え間なく言い立ててくることである。「頭がない」ことを示すために、「彼」はこれに絶え間なく反論をしていかねばならない。では、これに反論をやめたとき、すなわち「彼」が頭はあると認め、他者と同様な存在であることが示されたとき、何が起こるだろうか。何も起こりはしない、と私は思う。依然として「彼」は「彼」であり続け、他者は他者であり続けるだろう。

すなわち、何らかの仕方で差異化をしなくても、私は他者ではないこの私でありつづけ

る。この私の存在が、すでに他者との差異化を実現してしまっているのである。ここから、そもそも何か物のような対象としてこの私を考えようとするモデルが間違っているということは考えられないだろうか。物のような対象としてこの私を見る場合、他者と私の重要な意味での差異は見つけられない。ここにおいて「彼」の独我論はうまくいかなくなる。しかし、事実として、私はこの私であり他者ではありえない。ここで Wittgenstein は存在論的な差異化を行う。すなわち、身体を持つ人間としての私は確かに他者とある程度の対称性を持つ。しかし、それは「私の事実」における対象としてのみであり、それがそのままこの私であるわけではない。すなわち、他者ではありえないこの私は、世界の限界として存在するのである。ここにおいて、Wittgenstein の独我論はうまくいく。ただし、それは彼が前提としている強い要請を受けいれる限りにおいてのみである。

ここで、私が強調したいポイントは、全ての経験に先だってこの私が存在すると考えるとうまくいかず、この私が「私の」経験から成立する（あるいは実現される）と考えるとうまくいくということである。

ここから、「私とは何か」という問題を考えていくモデルとして、この私は「私の」経験から成立すると考えていく動機が生まれる。そして、次の探求の道として、「私の」経験からいかにしてこの私が成立するのか、そして「私の」経験はなぜ「他者の」経験ではありえないのか（すなわち、なぜこの私と他者の差異化は実現してしまっているのか）という二つの道が示される。これらに対する回答を私は準備しているが、まだ十分な議論ができていないため、本稿では詳しく述べることはできない。しかし、先取りして見通しを語っておくとこのモデルは Wittgenstein の強い要請を受けいれずとも支持可能である。そして、その、この私の成立は他者においても同様に可能であるため、もはや独我論ではなくなることになる私は考えている。

## 5. 最後に

本稿では、「私とは何か」という問題を考えていくモデルを検討するために二つの独我論を用いた。そこで、この私は「私の」経験から成立すると考えるというモデルが提案された。このモデルは「私とは何か」という問題に解答を与えるためには更なる批判検討と洗練をほどこしていかなければならないだろう。しかし、「私とは何か」という巨大な問いに対し、その解答への筋道を一つ提案できたことに本稿の一片の価値があるのではないかと私は思う。

## 文献

- Harding, D. E. (1972), 'On Having No Head', in D. R. Hofstadter & D. C. Dennett (Eds.), *The Mind's I: Fantasies and Reflections on Self and Soul*, Basic Books. 〔「頭がない私」, 永井均訳, 『マインズ・アイーコン ピューター時代の「心」と「私」(上)』, 坂元百大監訳, ティビーエス・ブリタニカ, 32-43 頁, 1992.〕
- Wittgenstein L. (1918). *Tractatus Logico-Philosophicus*. 〔『論理哲学論考』, 野矢茂樹訳, 岩波書店, 2003.〕
- 野矢茂樹 (2002). 『「論理哲学論考」を読む』, ちくま学芸文庫.

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕